教科等研究会（中学校保健体育部会）
令和元年度　研究活動のまとめ

1　研究テーマ

主体的・対話的に取り組み、体力を高める体育授業

～運動の楽しさや必要性を感じさせ、関心・意欲を引き出す授業～

2　研究経過

第１回			第２回（研究授業）			第３回（実践発表会）			第４回（研究授業）		
期日	人数	場所	期日	場所	授業者	期日	場所	授業者	期日	場所	授業者
6／3	15	益城中学校	10／4	嘉島西小学校	安部拓哉（嘉島西小学校）	11／15	甲佐中学校	各中学校代表者	1／23	甲佐中学校	米田豊和（甲佐中学校）

3　研究の概要

(1) 研究の内容

近年、これからの時代に求められる資質・能力を身に付けるために「主体的・対話的で深い学び」の必要性が叫ばれている。また、体育・保健体育科の授業では「運動やスポーツが楽しいと感じる授業づくり」が目指されている。このような状況の中、本部会でも「主体的・対話的」や「運動の楽しさ」をキーワードとして、研究テーマを設定した。また、本部会では長年に渡って体力向上に向けた取り組みを行ってきた。その成果として、徐々に本郡生徒の体力は向上傾向が見られるものの、依然として体力・運動能力調査結果では県や全国平均を下回る種目が多い。そこで、体力を向上させるためには、生徒が自主的に運動を行おうとする関心・意欲を高めるための手立てが必要であると考え、授業の共通実践事項として「①主体的な取り組み」と「②対話的な取り組み」を２つの柱として研究を進めた。

① 生徒が主体的に取り組む授業づくりについて

授業への見通しを持つことや、授業の中で振り返りを行うことが生徒の主体的な取り組みにつながると考え、単元計画表や授業の１時間の流れを示したメニューボードの掲示を共通実践事項とした。これにより生徒は単元目標や単元全体の見通しを持てると共に、毎時間の学習のめあてや流れを理解して活動ができるようなり、結果として教師の指示が無くても生徒が主体的に活動する場面が増えた。また、このことは見通しを持つことが苦手な生徒にとっても有効な手法であったと考える。

図１　授業のめあてを説明する様子

体育授業の中では「できる」だけでなく、授業の内容や動きの意味が「分かる」ようになると生徒は主体的に活動しやすくなる。そこで、本時のめあて（学習目標）を分かりやすく、具体的な行動様式で表記するよう工夫した。例えば、「判定試合に積極的に取り組もう」というような抽象的なものではなく、「気剣体の一致を意識しながら判定試合に挑戦しよう」というような、生徒がこの授業の中での「やるべきこと」が分かりやすい表現で提示するようにした。

また、「自分の動き」は自分では見えないので、自分の動きに課題があってもそれを理解することは難しい。そこで、今回は ICT を活用し「視覚化」という方法で、生徒の理解を促すようにした。図２はタブレット端末を用いて、ペアの動きを確認している様子である。このように、自分では見えないものを実際に見ることで、課題を理解し、より積極的に授

業に取り組む様子が見られた。

生徒が「分かる・できる」喜びを実感するために、展開の場面においては、生徒が課題を解決する場面を計画的に位置づけるようにした。この場面では、発問の仕方や生徒同士での相互評価のやり方を工夫し、生徒自らが課題を見つけ、その課題の解決に向けて、考えを伝え合うようにした。

図２　タブレット端末で動きの確認をする様子

図３　相互評価におけるチェックポイント

図３は、剣道の授業で行った生徒同士の相互評価におけるチェックポイントの内容である。このようにチェックポイントがはっきりと決められていることで、相手を評価するときの視点が明確となり、評価されたときにも、自分の課題が具体的にわかり、課題解決に向けたその後の活動にも主体的に取り組むようになった。特に、課題解決の場面では、ペアやグループでの活動に取り組むという流れを固定化し、仲間と関わり合いながら課題を解決できるようにした。

②　生徒が対話的に取り組む授業づくりについて

新学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、本研究会では対話的な活動を多く取り入れている。具体的には、ペア学習やグループ学習の時間を多く設定し、生徒同士で課題解決に向けた学習ができるようにした。その際、ただ「話し合いなさい」と指示するだけではなく、「何について教え合い、話し合うのか」という視点を明確に示すようにした。

図４　教師が巡回しながら、アドバイスする様子

また、話し合いや教え合いを行う時間には、生徒だけに委ねるのではなく、教師が巡回し、積極的に賞賛し、助言を重ねた。生徒たちは、話し合い・教え合いの回数を重ねていくと「ここがいいね」や「がんばれ」などの仲間のやる気を引き出す言葉を使うことが増え、「○○ができているかを見ていて」など、自分で仲間に協力を求めながら、学習を進めることができるようになった。

授業のまとめの段階では、学習カードをもとにして、生徒が学習を振り返る場面を設定し、１時間の授業の中で学んだことを伝え合った。生徒は話し合いを通して、自分では気づくことができなかった事柄にも気づきがもてるになり、授業での学びを更に深めていた。

(2) 成果と課題（　○：成果　●：課題　）

①　生徒が主体的に取り組む授業づくりについて

○単元の流れや１時間の授業の流れを提示することで、生徒が見通しをもって活動し、積極的に運動に取り組む場面が増えた。

○仲間と関わり合いながら課題解決する活動は、運動を苦手する生徒に「なんとなく楽しい」や「やってみてよかった」という満足感をもたせ、意欲を高めることにつながった。

○ICTを使うことで、自分の課題が「視覚」で理解できるようになった。

●ICTを使う場合は運動量のことも考えないと、体力向上につながらない。

②　生徒が対話的に取り組む授業づくりについて

○話し合い活動を行う前に、教師が「話し合う内容」や「話し合いの中での役割分担」についての指示を明確に示したことで、話し合いがスムーズで活発なものとなった。

○学習カードや技能のポイントチェック表等、思考ツールを用いることで、生徒同士の教え合いや話し合いが活発になった。

○話し合い活動の中では、グループのメンバーそれぞれが自分の課題についての話しをするので、運動が苦手な生徒も「課題をもっているのは自分だけじゃない」という安心感をもち、今まで以上に積極的に運動に取り組むようになった。

●仲間の技をチェックする活動では「できていなかった」ということだけで終わり、その後の改善策まで提案することができない生徒が多かった。

4　実践事例

(1) 授業の概要

中学１年生「剣道」

授業者：米田　豊和教諭（甲佐中学校）

剣道が得意な生徒だけでなく、剣道を苦手とする生徒にも「授業がおもしろい」と感じさせるための工夫が散りばめられている授業であった。特に、剣道への関心を高めるための活動としては、教師が模擬刀を用いて「刃筋正しく」についての説明を行った。また、授業の中では、グループ活動が多く取り入れられており、生徒は、このグループ活動を通し、「みんなで協力できる喜び」を感じながら、剣道への関心と意欲を高めた。更に、自分の課題に気づかせる手立てとしては、タブレット端末を使って仲間の動きを撮影するという活動を行った。この活動では、仲間の動きを見ることで、自分の動きの課題にも気づけるという工夫がなされていた。また、話し合いの場面では、話し合うポイントが明確になっており、撮影した動画を見ながら、積極的な話し合いや教え合いをする様子が見られた。

導入部分で行われたスキルウォームアップは、剣道の動きにつながる運動を行うことで、体力向上だけでなく、剣道の技能を高めるためにも有効なものであった。

(2) 授業研究会

①授業者自評

・防具をつけないことや判定試合を行うことは、剣道を専門とする教師でなくても生徒が積極的に授業に取り組む授業を行うための工夫の一つである。

・タブレット端末を使うメリットは「焦点化」や「共有化」等、多くのことがあるが、今回はその中でも「視覚化」に重点を置いた。実際、自分の動きを実際に映し出すことで課題の理解を促すことができた。

②質疑応答・研究協議

Ｑ：判定試合もよいが、実際に打突を行うことが剣道の魅力ではないのか？

Ａ：確かに一本を目指して打突をすることは大切なことだと思う。しかし、防具を付けると時間がかかり、体を動かす時間が短くなってしまう。防具を付けての打突は、３年生になった時点で行おうと考えている。

Ｑ：体力を高めるためには、スキルウォームアップの他にも、普通の補強運動を行った方がよいのではないか？

Ａ：剣道の動きは、一見すると体力を使っていないように見えるが、竹刀を持っているだけでも握力が鍛えられ、竹刀を振り上げることで筋力も使う。よって、今回のスキルウォームアップだけでも十分に体力を高める効果があると考えている。

Ｑ：グループを作る上での工夫は？

Ａ：クラスの中に剣道経験者がいないということもあり、クラスの生活班をベースにしてグループ編成を行った。普段から一緒に過ごしているメンバーなので、話し合いの時にも活発な意見が出やすいという利点がある。

～協議～（今回の授業をもとに剣道の授業の工夫改善を考える）

・剣道の楽しさである「打つ」ことを生徒に味合わせる授業を作ることが必要。それが、今回の授業でも重要視されていた「気剣体の一致」の理解にもつながると思う。

・生徒に動きのイメージをつかませるためには ICT も有効だと思うが、教師が「指導言葉」を増やすことが必要。それができれば、更に生徒の理解が深まると思う。

③助言者まとめ

生徒たちが主体的・対話的に活動するための手立てがなされていた。タブレット端末を使うことで、仲間と課題を共有し、仲間と共に課題解決に向かおうとする姿勢見られたので、課題解決の方法を教師側が提示することで更に技能が向上すると感じた。

第１学年１・２組　保健体育科学習指導案

場　所：甲佐中学校体育館
指導者：教諭　米田　豊和

１　単元名　　武道　「剣道」
２　本時の学習
（１）本時の目標：気剣体の一致を意識しながら判定試合に挑戦できる。

過程	学習活動（学習形態）	教師の指導・支援	備考
見通す 15分	※始業前に竹刀を準備してチャイムを待つ。　（一斉） 1　竹刀の準備・集合挨拶・健康観察をする。（一斉） 2　剣道の理念を暗唱する。（一斉） 3　補強運動を行う。（一斉） 4　ｽｷﾙw-up+基本動作を行う（一斉） 5　本時の目標と学習内容を確認する。　（一斉）	・竹刀の安全性に問題がないか確認させる。 ・全員で安全に留意しながら準備を素早く行わせる。 ・見学生への配慮を行う。 ・剣道の理念を暗唱させることで剣道の本質に迫らせる。 ・体の機能と自分の体力の課題を意識させながら行わせる。 ・事前に学習した「基礎運動」であることを理解させる。 ・楽しみながら基本に忠実に行わせ、基本技能を体得させる。 ・大きな発声をすることで技能向上と回数の確認を行う。 ・つなぎ言葉を使って、全員が理解できるようにする。 **見通しを持たせる手立て** ※学習計画ボードで本時の学習を確認し、学習の見通しを持たせる。 めあて：気剣体の一致を意識しながら判定試合に挑戦しよう 。	竹刀 掲示①
考える 17分	6「判定試合」の模範演技を見る。（一斉） 7　ポイント説明をする。（一斉） 8「判定試合」の練習をする。（ｸﾞﾙｰﾌﾟ）	**徹底指導のポイント（つなぎ言葉）** ①気剣体の一致 ②刃筋正しく ・師範して懸かり手、元立ち、審判イメージをつかませる。 【 判定試合のルール】 ①懸かり手、元立ちの順番で打突する。 ②両者が終わったら審判が判定する。 ③判定後に判定理由の説明をグループで行う。 **中心となる言語活動を徹底させるための手立て** 気剣体の一致の意味を理解しながら技の稽古ができる掲示とタブレットを活用して示す。 **能動型学習のポイント** 判定は気剣体の一致で行われることを理解させ、お互いに活発に意見交換できるようにする。	掲示③ 大型モニター 評価⑥ ﾀﾌﾞﾚｯﾄ 掲示④ ﾁｪｯｸｶｰﾄﾞ ﾁｪｯｸｶｰﾄﾞ 評価⑨
高める 18分	9「判定試合」をする。（ｸﾞﾙｰﾌﾟ）	・班の中で判定試合をして、ポイントを理解させながら、技能を高めさせる。	
振り返る 5分	10 本時のまとめを行う。（ｸﾞﾙｰﾌﾟ・一斉） ・本時の成果と課題 ・次時の説明 ・挨拶	**振り返りのポイント** 気剣体の一致を意識しながら判定試合ができたかを振り返らせる。 ・認め合う雰囲気作りに努めながら、本時の目標に向けての学習の成果と課題を発表させる。 ・次時の学習の見通しを持たせる。 ・気持ちのこもった挨拶を心掛けさせる。	掲示⑤

３　終わりに
今年度は小学校とも連携して、研究を進めてきた。新学習指導要領の完全実施に向け、評価についても研究を深めながら、より良い授業を目指していきたいと思う。